隼人族の森を渡る風

創造の現場から　第50回

森の彫刻家　上床利秋

一隅を照らす

アフガニスタンにおける中村哲医師銃撃事件はあまりにも理不尽な出来事だった。

私は誰かに頼まれたわけではなかったが、中村哲医師の像を自分の手で造りたいという衝動が芽生えていた。

それも、粘土原型だけでなく、自分自身の手でブロンズにするというところまで。

中村哲氏を以前から陰で応援していた人は多い。

ある日、霧島市の粘土店で中村哲医師の話題になった時、店主のおばちゃんが以前から氏をテレビや新聞で知っておられて、氏が「照一隅」を座右の銘にされていたことを教えてくださった。そして、後日わざわざその新聞記事をコピーして私に郵送してくださったことがある。

1300℃に溶けたブロンズを鋳込む作業は危険を伴う大掛かりな仕事だが、友人たちがそれを無償で手伝ってくれた。こうしておおよそ1年間の試行錯誤の末に、やっとの思いで作品「アフガンに生きた侍」はブロンズ像として仕上げることが出来た。

十月の国立新美術館で開催された日展に「アフガンに生きた侍」というタイトル名で自作ブロンズを会員発表、十一月、鹿児島県歴史美術センター黎明館で開催された南日本美術展に同樹脂原型を委嘱発表してから後、博多のペシャワール会に私は手紙を書いた。中村医師を悼む思いと同時に自作のブロンズ像をペシャワール会に寄与するつもりで寄贈する気持ちでいることを一筆添えて。

十二月、私夫婦は博多在住の兄と3人で作品をビルの6階にあるペシャワール会に直接持ち込んだ。会の人々の気持ちや表情を直接確認し、自分の思いを誤解なく正確に伝えたかったのである。桜島溶岩を台座に付けたブロンズ像は総重量が80kgある。それを無事に手渡せたことで追悼の願いが叶い、晴れ晴れとした気分になった。

古川正敏事務局長をはじめとするペシャワール会の人々は喜びと感謝の笑顔で我々を迎えてくださった。事務所の一角に中村哲医師の遺影と同時に銃撃事件に巻き込まれた現地のガードマンや運転手5人の遺影も飾られていた。純粋なボランティアで運営されているこの会の人々の心はまた、爽やかで明るく誇りに満ちているように感じられた。

古川事務局長はどこにブロンズ像を飾れば良いか私に尋ねてくださったが、私は「それはペシャワール会の方で決めてください」と答えた。その後、談笑の中で中村哲氏に所縁のある古賀市に記念館を設置する計画があることが話題になり、そこに飾るのが相応しいということになった。

事務局長は「記念館のオープンの時には、また福岡に来てください。」と誘ってくださった。

その時は必ず出席させていただくつもりでいる。

日展会員　白日会会員　日本彫刻会正会員

国立新美術館　日展第三科会場で展示されたブロンズ像
「アフガンに生きた侍」筆者作

ペシャワール会事務所にて。左側３人がペシャワール会の方々。右側中央筆者
壁面中央には中村哲医師直筆の「開拓地に寄せる」と遺影。

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。
https://douzou.jp/
上床利秋　検索
バックナンバーも読むことができます。

レモン画材絵画教室　ご案内

- 隔週水曜日　10:00～　油絵・水彩教室
- 隔週土曜日　16:00～　油絵・水彩教室
- 隔週日曜日　16:00～　デッサン教室
- 隔週土曜日　①10:00～ ②13:30～　子供絵画教室
- 月1回 第2火曜　10:00～　和紙ちぎり絵教室

お申し込みはTEL 0995-45-1015国分進行堂・レモン画材まで